



みどりの風

平成29年9月1日発行
校報 第544号
(みどりの風 第87号)
練馬区立関町北小学校

指先の宇宙

校長 大野 泰弘

2学期が始まり、学校には子どもたちの元気で明るい笑顔が戻ってまいりました。皆様には、どのように今年の暑い夏を過ごされましたでしょうか。今年の夏は、全国各地で50年に一度とも言われる集中豪雨が頻発し、大きな被害が出ました。被害に遭われた地域の皆様には、心よりお見舞いを申しあげます。子どもたちや保護者の皆様の中にも、大きな被害の出た地域にご親族やお知り合いの方が生活されている方もいらっしゃるのではないかと案じております。これから台風シーズンがやってきますが、自然災害に対する備えを怠らないようにしたいものです。

ところで、この紙面では、これまでに私が鑑賞した映画をもとに、私なりの思いを記してまいりました。平成26年度には「世界の果ての通学路」、昨年度は「奇跡の授業」を取り上げました。そして、今年、と申しますと、今年もまた映画を1本だけですが、鑑賞することができましたので、そのことを紹介させていただきます。

その映画のタイトルは「もうろうをいきる」(制作・配給:シグロ 協力:全国盲ろう者協会ほか)です。90分ほどの短編のドキュメンタリー映画で、登場する盲ろう者の方は8名。8名の方が、どのような経緯で目や耳に障害をもつようになり、結果として光と音を失うようになったのかはそれぞれ異なりますが、お一人お一人が様々な方法でコミュニケーションをとる姿、悩みや不安を抱えながらも真剣に毎日を生きる姿を垣間見させていただきました。生まれながらにして光と音のない生活を強いられること、健康であったけれども病気や事故で光や音を失うことを受け入れざるをえなくなったこと、その心に寄り添うことは簡単ではありませんが、点字や触手話を駆使して、その方々を介護したり、支援したりしている方々の生き方や考え方には、多くのことを学ばされる思いがいたしました。

その中で、私が心に残った場面、というか言葉がありました。

それは、盲ろう者として、世界で初めて常勤の大学教員になった、福島 智 先生(東京大学先端科学技術研究センター教授 全国盲ろう者協会理事 世界盲ろう者連盟アジア地域代表)のお話でした。

福島先生は、我が国のバリアフリー研究の第一人者でいらっしゃいますが、そのお話は以下のようなものでした。

「(盲ろう者に)コミュニケーションや情報がないということは自分が何を言っているかわからないのです。ほかの人が何を言っているかわからないので、判断できない。(中略)

そういう、ないないづくしの中で、どうやって盲ろう者の人生を意味あるものにしていくかと考えたときに、やはり広い意味での人の力だと思っています。家族にとって、あるいは周囲の人にとって、その人はかけがえのない存在であって、誰かほかの人によって代えられる存在ではないのです。差別する側もされる側も常に自分以外の存在についてどこまで共感できるか、想像力を働かせることができるかという問いを突きつけられていると思うのです。」(____は大野)

そして、この福島先生がつくった詩が右の詩です。指先で宇宙を紡ぎ出す、こういう言葉の存在を感じるとともに、このようなコミュニケーションにより日々を生き抜いている人々への共感力、想像力を高めていくことが、私たちにも、そして、将来を生きる子どもたちにも求められると考えます。

本校では、地元のアイメイト協会やパラリンピック金メダリストの高橋勇市選手、福島先生が卒業された筑波大学附属視覚特別支援学校の先生等のご協力のもと、障害者理解を深める場を設定しておりますが、こういう場だけでなく、全ての学習機会を通して、豊かな共感力、想像力を育てていきたいと考えています。

結びに、この映画、今後全国各地で上映されるだけでなく、海外でも翻訳されて配給されることになるのだそうです。

指先の宇宙

福島 智

ぼくが光と音を失ったとき
そこには言葉がなかった
そして世界がなかった

ぼくは闇と静寂の中でただ一人
言葉をなくして座っていた

ぼくの指にきみの指が触れたとき
そこに言葉が生まれた
言葉は光を放ちメロディーを呼び戻した

ぼくが指先を通してきみとコミュニケーションするとき
そこに新たな宇宙が生まれ
ぼくは再び世界を発見した

コミュニケーションはぼくの命
ぼくの命はいつも言葉とともにある
指先の宇宙で紡ぎ出された言葉とともに

(ぼくの命は言葉とともにある 致知出版社より)